

2020年 5月24日礼拝式次第

日本基督教団半田教会  
横山良樹牧師

**招詞** : 詩46篇10節

静まって、わたしこそ主であることを知れ。  
わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、  
全地にあがめられる。

**讚美歌** : 21-17番（聖なる主の美しさと）より1番のみ

聖なる主の美しさと その栄えを仰いで  
まごころもて 御前に立ち 御名をたたえ あがめよう。

**詩篇交読** 134篇

**祈 禱**

わたしたちのために十字架にかかり、よみがえって天に昇り、いまもわたしたちを執り成しておられる主イエス・キリストの父なる神さま。今朝も、新しい命を与えられて、聖日の朝（あした）を愛する兄弟姉妹とともに迎えることが許され、心から感謝いたします。月曜から土曜まで、わたしたちは聖日から送り出されたそれぞれの持ち場で、あなたの証人として用いられ、この主の復活の日に、すべてのことから解き放たれて、ただあなたの御前に神の子として招かれ、整えて下さる恵みを感謝します。世の中は新型コロナウイルス感染症対策下になおありますが、しだいに原状復帰へと舵を切り始めています。どうかわたしたちをお守りください。わたしたちにとりまして命のことはあなたの計らいの内に置かれており、委ねることが許されていること、キリストの御業によって罪の問題が解決され、死が眠りへと変えられていることが何よりの平安であります。御言葉に聴き、あなたがわたしたちの主であることを今日も心に刻み、ひとりひとりを力づけてください。主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力である、という御言葉があります。わたしたちの心をあなたへの感謝と賛美で満たし、あなたを喜ぶ日とさせてください。またわたしたち一人ひとりがキリストをかしらとする兄弟姉妹として結び合わされることでそれぞれの働きを自覚をし、キリストの代理として、

和解と慰めの働き人として、愛のために労苦をする働きを担う者として整えてください。それがわたしたちの主がわたしたちに仕える者となって下さり、ご自身の命をおいてくださったことに対する感謝の応答となりますように。ただあなたの御名が崇められる働きとなるように、どうか聖霊を送り、わたしたちを導いてください。わたしたちを憐み、あなたの御言葉によって生きる道に平安と平和の道があることを知らしめてください。御言葉に聴きます。どうか、あなたの霊によって、この場を清め、整え、あなたのご臨在を仰ぐ場としてください。この場に集うことの出来ない兄弟姉妹の上にもあなたからの顧みが豊かにありますように、この地にある神の民の働きをお守り下さい。この祈り主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

**聖書朗読** : テサロニケの信徒への手紙 1 1章5～10節

わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけにはならず、力と、聖霊と、強い確信とによったのです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかはご承知の通りです。そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところに伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れ、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまた、どのように御子が天から来られるのを待つようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださいるイエスです。

**讚美歌** : 21-171 番「かみさまの愛は」(4番)

かみさまの愛はしみとおる わたしたちの心に

日の光のように さあ みんな一緒に賛美の歌をうたおう  
いつまでも一緒に 賛美の歌をうたおう。

説教： 「力と、聖霊と、強い確信」

「わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったのです」

そうパウロはテサロニケの人々に語りかけました。彼らに原点を思い起こさせるためです。福音はそのようにして、初めて命を得て、テサロニケの人々に救いをもたらしたのです。今朝は、この御言葉に聴きたいと願っています。まず、わたしがここで襟を糺す思いにさせられるのが「わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは」という一言。ただの「福音」ではなくて、「わたしたちの・福音」と、福音に所有格がついていることです。これは見逃してはなりません。初めに書かれた福音書、マルコの冒頭は、「神の子、イエス・キリストの福音の初め」でした。福音とは、初め、神の子である、イエス・キリストの福音なのです。つまり「彼の」福音、彼についてのよい音ずれ、知らせ、それが「わたしたちの」福音になっている。このわたしたちとは、手紙の冒頭であいさつをしているパウロ・シルワノ・テモテの福音ということでしょう。このイエス・キリストの福音が、パウロを生かす福音となった。つまりパウロや、シルワノや、テモテの血や肉となり、生かすものとなったときに、それは「わたしたちの福音」と呼べるものになる。このところコロナウィルスのことばかり考えているので、ついそちら側に引き寄せてしまうのですが、キリスト教が感染（うつ）るとしたら、他人に感染する力を持つとしたら、イエス・キリストの福音、彼についての福音が、わたしの福音になったときです。その時に初めて伝わる力を持つ。伝染する。それが伝道の実際ではないかと思うのです。先週、わたくしは、神はほかにどのような手段をおとりになることが出来たにもかかわらず、わたしたちを用いて伝道することをお選びになったと言いました。それはこのように彼についての福音がわたしの福音になることによってです。具体的には、パウロがここで述べていますように、「あなたがたがひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」たこと、そしてそのことによって「パウロ・シルワノ・テモテに倣う者」となり、それが「主に倣う者となった」という道筋を辿ってです。それぞれの人格を通して生きられたキリストの福音が、わたしの福

音となり、彼らの福音となって行く過程が鮮やかに浮かび上がります。そのプロセスを指して、パウロはあなた方のなしたことは地域に対する証であり、模範であると、彼らのことを神に感謝しているのです。7節に、マケドニア州とアカイア州にあなたがたから出た主の言葉が響き渡ったと述べている通りです。ちなみにマケドニア州の都がテサロニケで、アカイア州の都がアテネです。こういう表現を読みますと、まるで彼らの体がトランペットやホルンのように、福音によって楽器のように周囲によい証のハーモニーを響かせているイメージが浮かんできます。それは9節以下にあるように、テサロニケの人々が偶像から解放されて神に立ち帰り、生ける真の神に仕えるようになったようす、御子イエスが再び天から来られるのを待ち望む新しい生きかたにチェンジしたようす、そういう生活の具体的な変化によって、周囲の人々が、イエス・キリストの福音を受け入れて生き始めた人々は何かわたしたちと違うぞという気付きを、それもよい驚きを与えられるようになったということですね。御言葉によって人格と人生と共同体が創り上げられてゆくさまが驚きをもって受け入れられている。ここに福音がもつ力が明らかにされているのです。今朝、わたしが心に留めたいと願うことは、このように福音が根付き、人々の生き方を変えていった一番の根本は、わたしたちの福音が、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったとパウロがその秘密を明らかにしていることです。聖書に証をされるイエス・キリストの福音が、わたしたちを生かす福音となり、それがテサロニケの人々のなかにも受け入れられて、彼らを作り替えてゆく。そういう「感染力をもつ」には、言葉だけでは足りない。御言葉にともなう力、すなわち聖霊の働きと、その働きに信頼する強い確信とが必要だということです。使徒言行録をみますとテサロニケ伝道は、パウロの第二回伝道旅行の時なのですが、福音が海峡をこえてアジアからヨーロッパに入って拡大してゆくときにひとつのパターンがあります。それは新しい町に到着すると、そこにはかならずユダヤ人のコミュニティがありますので、パウロはそこに顔を出し、彼らのコミュニティセンターであるシナゴグ（礼拝堂）で証をするのです。パウロ自身はもともと熱心なユダヤ教徒でした。しかし、神の約束はすべてナザレのイエスにおいて実現したのだということを知らされて、それこそ目から鱗が落ちることわざを後の世に残すことになった劇的な回心をへて、わたしたちユダヤ人が十字架にかけて殺したナザレのイエスこそ、神の子であり、救い主であり、神はイエスを死から復活させることによって罪と死の支配からわたしたちを解放し、永遠のいのちを約束して下さった。このイエス・キリストの

出来事が、パウロ自身を新しく生かす喜びの知らせ、すなわち福音となったのです。言葉だけではなく、パウロ自身が聖霊によって導かれ、上よりの力に触れて回心を遂げました。キリスト教は旧約聖書を正典としていることから分かるように、ユダヤ教のなかから誕生しています。この共通の土台から、パウロは説き起こし、神の約束がナザレのイエスにおいて成就したという神の真実を聖霊の導きを祈りつつ指し示す。説き明かす。これがパウロの宣教でした。それは言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信によるものでした。最後に、この強い確信についてもうひと言だけ付け加えます。

むかし神学校の教授が、熱心な青年が献身するのではない。本物にふれた青年が献身するのだと言いました。その通りだと思います。この「本物」という部分が、言葉だけによらない、力と、聖霊と、強い確信の三点セットだと思うのです。恩師の長津栄先生が話しておられたことなのですが、瀬戸永泉教会の創設者でもある宣教師のジェームズ・バラが瀬戸で伝道をした時のことです。バラが顔を真っ赤にし、うっすらと鼻のあたりに汗をかいて、必死になって語った言葉は「カメハ、ニンジンヲ、アイシタモウ」だったそうです。わたしはこの話に胸が詰まるのですが、人々はそれを聞いて、しかし、信じたのです。もちろん「神は人間を愛し給う」です。カタコトの日本語でキリストの福音を宣べ伝えようとするその姿、太平洋を越えてこの小さな島国の地方都市まで交通手段も不便だった時代にやってくる熱意、そこには「ひとりも滅びるのは御心ではない」という主の覚悟を生きる伝道者の志があります。「御言葉を宣べ伝えずんば止まず」という覚悟、ここで言う強い確信があったに違いない。パウロの中に、テサロニケの人々の中に、わたしたちの中に、福音が生きて働くとはこういうことではないでしょうか。そして、それは天に座しているのではなく、わたしたちを深く憐れんで、飼いやおけから十字架の道行きを歩まれたわたしたちの救い主イエス・キリストの御生涯に触れた喜び、そこに示された神の深い愛にふれた感激が力となって、確信の深さとなって押し出されてゆく。テクニクでも、雄弁でもなく、ただ神に赦され、愛されて生かされているわたしの喜びを見てください。この救いにあなたも与ってくださいという感謝の応答が、その熱が感染力をもってわたしを生かした福音にあなたも与ってくださいという願いとして、祈りとして手渡されてゆく。その熱が人の世を温め、結んでゆく。そこにキリストの福音の有難さ、神の力、わたしたちの喜びがある。それをイエスさまは、わたしたちのなかにある神の国と呼ばれたのではなかったでしょうか。テサロニケの人々の生きざまから、この秘密が明らかとなったことが伝道者パウ

口の感謝なのです。この姿勢にわたしたちも倣いたく願います

お祈りいたします。

神さま、あなたの御子の福音が、あなたの憐みと恵みによって、わたしの福音となりました。わたしたちは一つの群れとされて、あなたを賛美し、礼拝し、わたしたちを生かすあなたの御子の福音の出来事に、わたしたちの大切な人々を招き入れる働きを託されています。主よ、感謝をいたします。どうか、わたしたちの日々の生活を福音から捉えなおすことを得させてください。あなたとあなたの御子の働きを通して、わたしのなすことを顧み、ただ御心が行われることを喜びとする人格を、主よ、聖霊によってわたしたちのうちに築いて下さい。そしてあなたの器としてもちいてください。この願い、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

**讚美歌 21-461** 「みめぐみゆたけき」(1番)

みめぐみゆたけき 主の手にひかれて  
この世の旅路ぞ 歩むぞうれしき  
たえなるみ恵み 日に日に受けつつ  
みあとを行くこそ こよなきさちなれ

**献 金**

**報 告**

添付の週報をご覧ください

**祈 禱**

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、ともに礼拝をささげる日が与えられるように。

**主の祈り**

天にまします我らの父よ  
ねがわくば御名をあがめさせたまえ

御国を来たせたまえ  
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく  
我らの罪をも ゆるしたまえ  
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ  
国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、  
父なる神の愛と  
聖霊との親しき御交わりが  
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く  
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！